

方言で語るということ —「方言コスプレ」から見る井伏文学—

脇 忠幸
(人間文化学科)

小説や会話で意識的に自方言以外の方言を用いることには、どのような意味があるのだろうか。本稿では「方言コスプレ」という観点から井伏作品を分析し、現代社会における方言の社会的機能を再考する。井伏は、東京／標準語への複雑な感情と向き合いながら、物語世界の構築のために巧みに方言を使用していた。彼の意識や実践と比較したとき、現代における方言使用には自己充足的な偏った消費という否定的な側面が見出される。

【キーワード：方言，方言コスプレ，ナラティブ，井伏鱒二】

1. はじめに

私たちは、日々の経験や出来事を他者に話して聞かせることがある。このような「具体的な出来事や経験を順序立てて物語ったもの」すなわちナラティブ (narrative) は、日常的な現象であり行為である。この行為を物語の産出だと捉えれば、小説もナラティブの中に組み込むことができるだろう。事実、文学研究におけるナラティブ分析はナラトロジー (narratology) として知られている。人間を「物語る動物」「物語る欲望に取り憑かれた存在」(野家 2005) だと捉えるとき、ナラティブは「日常」「社会」を解剖するキーワードとなるのである。

日常会話におけるナラティブと、小説(狭義のテキスト)としてのナラティブは、決して同一のものではない。会話と文章というジャンルの差異は、言語使用において決定的な差異を生み出すからである。一方で、この二種のナラティブはまったく異なるものでもない。なぜなら、いずれも虚構の要素を含み持つからである。

たとえそれが事実にもとづく経験談であったとしても、それは語り手にとっての「事実」「経験」であって、必ずしも客観的な事実とは限らない。「あの時・あそこ」での出来事は、ナラティブを通して常に「いま・ここ」で(再)構築されるのである。小説においては、「書き手」「語り手」などの要素と複雑にかつ密接に関わるため、この(再)構築の過程は小説を書く／読むという行為そのものに肉薄するだろう。

その物語／物語ることにおいて、自方言以外の方言(地域方言と社会方言)が用いられることがある。会話レベルにおいては、特に若年層に自方言以外の方言使用が確認されており(「方言コスプレ」)、地域方言の肯定的な再評価として注目されている(田中 2011)。小説においても「方言小説」「方言文学」などと呼ばれるものが存在し、他のジャンル(たとえば映画；灰谷 2012)で

も方言の意図的な利用が確認できる。かつての方言撲滅の風潮からしてみれば、このことは歓迎すべき事柄なのかもしれない。しかし、こうした方言の復権は肯定的な側面しか持たないものなのだろうか。特に、若年層を中心に見られる「方言コスプレ」には負の側面も存在するのではないだろうか。

そこで、本稿では以下の二点を目的とする。まず、小説（井伏鱒二の作品）に見られる方言使用を「方言コスプレ」という観点から分析し、方言使用が物語世界の構築にいかにか寄与しているのかを明らかにすることである。次に、今度は井伏作品の分析から「方言コスプレ」を逆照射し、現代社会における「方言」（特に地域方言）という存在について再考する。

2. 方法

分析対象として、井伏鱒二の作品を取り上げる。井伏は方言で小説を書く作家として同時代的な評価を受けている（岩淵ほか 1956）が、後述するように必ずしも自方言をそのまま用いているわけではない。彼の作品のうち、『朽助のいる谷間』『さざなみ軍記』『ジョン万次郎漂流記』『二つの話』に注目し、そのテキストにおいて方言がどのような機能を持っているのかを分析する（底本については論文末尾「取り上げた作品一覧」を参照）。これらの作品を選出したのは、藤本（1972）における「初期（昭和2年～6年）」「中期（昭和8年～15年）」「後期（昭和14年～）」という分類に従い、この三期からそれぞれ手に入れやすいものを選んだためである。

続く3章で確認するように、井伏と方言の関係については多くの先行研究が存在する。本稿では基本的にその「巨人の肩」に乗りつつも、「役割語」の使用実態を指す「方言コスプレ」という新たな切り口によって井伏作品における方言使用について捉えなおす。役割語とは「特定のキャラクターと結びついた、特徴ある言葉づかいのこと」（金水 2003）をいう。また、方言コスプレとは以下のように定義される現象である。

話し手自身が本来身につけている生まれ育った土地の「方言」（生育地方言）とは関わりなく、日本語社会で生活する人々の頭の中にあるイメージとしての「〇〇方言」を、その場その場で演出しようとするキャラクター、雰囲気、内容にあわせて臨時的に着脱すること（田中 2011, p.3）

これら二つの概念は、ステレオタイプにもとづく「特徴ある言葉づかい」（役割語）を「臨時的に着脱する」現象（方言コスプレ）という一連の関係性の中で捉えることができる。

田中（2011）は、井伏作品における方言について、役割語を用いた方言コスプレだと認めている。しかし、詳細な分析はされておらず、その実態は不明である。また、後述するように、田中はこの現象を肯定的に捉えているようである（少なくとも否定的ではない）。筆者も、この現象に肯定的な側面を見出すことに賛同はする。しかし、肯定的な解釈のみというのは、いささか楽観

的ではないかとも考える。「方言コスプレ」を分析概念として用いることで、井伏の表現選択への意識とその使用実態を明らかにし、現代社会における方言使用の肯定的／否定的な側面を検証する。

3. 方言使用の文学史と井伏作品

文学作品における方言使用は、何も井伏に始まったことではない。明治の終わり頃から「地方人の表情を内面から浮き彫りにすると共に、その中に融けこんでいる生活風習を忠實に傳えて地方色を鮮明に現わそうとする寫實的な要求」「標準語では現わせぬ複雑微妙な味を出そうとする新しい實驗」(大野 1954) として登場するようになった。

この背景には自然主義の広がり契機の一つとしてあったと考えられる。このことについて、1956年に行われた吉田精一、西尾実、中野重治による座談会(進行は岩淵悦太郎)では、吉田が以下のように指摘している(岩淵ほか 1956)。

吉田「やはり自然主義が出て来て、自然主義のローカル・カラーの、一種の現実性を求める、ということから方言が多くなって来たんじゃないかと思うんですね。」(p.2)

一方で、自然主義だけでは方言文学の勃興はなかったという見方も存在する。磯貝(1981)は、自然主義者は「とくに方言に密着しようとする姿勢は見られず、「内容本位で、ことば自体のおもしろさなどへの関心は薄かった」としている。自然主義系に続く写生文系の作品にこそ、本格的な方言へのまなざしが見てとれるという。

方言を、ただ、それが存在するから写すということではなく、新しい文学創造の重要な拠点として、意図して使おうとする動きは、昭和に始まった。その荷い手は、井伏鱒二であり、谷崎潤一郎であり、また、宮沢賢治をもここに加えて考えたい。(磯貝 1981, p.337)

文学史における方言文学の契機を確定することは難しいのかもしれない。ただ、どこまで意図的であるかは別として、文学作品における方言使用は「ローカル」の「現実性」を写し取る手段として捉えることが可能だろう。強い意識を伴った使用の場合、この「ローカル」に対立するものは言うまでもなく「東京」であり「標準語」である。前述の座談会で西尾は以下のように述べる。

西尾「やはり時代も明治から大正でしょうが、そういう意味での近代文学が東京方言でもないし、東京弁でもなく、いわゆる標準語文章をさかんに使っていたんじゃないか。それが今少しその限界がわかってきて、少しゆらいでいるんじゃないか。」

(p.10)

ここでいう「今」は 1956 年当時のことであり、異端／方言⇔正統／標準語という二項対立が、明治以降も続いていることが窺える。席上、西尾の言う「ゆらいでいる」状況を指して「標準語に対する輸血作用」(中野)という発言もある。この座談会からは、あくまで小説における正統な言葉は「標準語」であり、方言はその限界を補完するものという認識が見てとれる。当時各地で標準語教育が行われていたことから考えると、この認識は偏った言語観とは言えないのかもしれない。少なくともこの時までには、方言文学は自立的な存在というよりも、「標準語文章」をより洗練させるための手段でしかなかったと考えられる。

こうした時代において、井伏はどのような作家として捉えられていたのだろうか。件の座談会は、リアリティ／自然主義⇔ユーモラス／江戸文学という構図で話が展開されていくのだが、この文脈において井伏の名前が登場する。谷崎の『刊』(1928 年)と対比させながら、井伏の方言は「必ずしもリアリティというものではなく、「井伏文学の構成要素になってしまってる」という以下の指摘は非常に興味深い。

吉田「ユーモラスなのとか、構えて滑稽を並べるといふ。必ずしもリアリティというものではないんじゃないかと思うんですね。井伏鱒二の物も多分にそれがあるんですね。」

中野「その通りのことばが方言として実在するか知れないけれども、井伏鱒二の作品になると井伏文学の構成要素になってしまってる。」

吉田「谷崎さんの場合は、京都のことば、関西のことばの美しさを意識して生かそうということがあって、似てるか知れないけれども少し違うように思いますね。」

(p.3)

井伏が作品内で用いる方言は必ずしも正確なものではない、ということはこれまで多く論じられてきた。たとえば磯貝(1981)においても、井伏が「あみだした方言は、ふしぎなものであり、「意識して、それ(※筆者註：方言)を大胆にアレンジしたもの」だと指摘されている。本稿においてもその追認を行うことになるが(詳細は後述)、井伏作品での方言使用はかなり意識的な演出であったと考えるべきだろう。同時代評としても現代的な視点からしても、井伏はいわば「方言で／を描く作家」だと言えよう。

4. 井伏作品における方言使用とその機能

では、井伏作品において、実際にどのような方言がどのように用いられているのだろうか。作品ごとに分析と考察を試みる(ページ数は底本による)。

4.1 『朽助のいる谷間』と地域方言

この作品は全体にわたって方言が用いられており、これまでも「方言文学」「方言小説」として取り上げられてきた。

- ・「是ッ非ですがな。したれど、もう一ぺん行きし戻りししますぞな」(p.21)
- ・「私らはなんぼうにもつらいでがす！」(p.24)
- ・「(略) 私らも、あんたが流暢な演説をこくところは、またと見られんじゃろと思いますがな」(p.30)
- ・「池に水がたまったら、鯉の子を百びきも買うて来て放したろかと思うとります」(p.41)

これらはすべて朽助の発話であり、「がな」「ぞな」「じゃろ」などの文末詞、「なんぼう」「買うて」などの音声レベルの表記に地域方言の特徴が表れている。

この小説の冒頭部分で、朽助は「私」から以下のような人物として認識されている。

谷本朽助（本年七十七歳）は実に頑固に私を最屢している。（略）彼はそれ等の茸類の発生する山の番人である。その山は、すでに私の祖父の時代に他人へ売却したものであるにもかかわらず、彼は頑迷に昔からの習慣を守っているのである。（p.20）

朽助の用いる方言は、彼の「頑固」「頑迷」なキャラクターを構築し演出するための役割語として作用している。

役割語としての方言使用は、朽助以外の登場人物（私とタエト）にも確認できる。「私」は成人男性で「文学青年の暮し」をしているとされており、小さいころは方言を使用していたが帰郷した彼は共通語しか用いない。

- ・「君も食べたまえ。よく熟したのがうまいぜ。これは酸っぱそうだが、これはうまいぜ」(p.32)
- ・「そんなところで居眠りする真似をして、からだに毒だぜ」(p.44)

朽助の孫娘であり、日本語母語話者（母親）と（明確な記述はないが）英語母語話者（父親）の間に生まれた少女・タエトも共通語しか話さない。くわえて言えば、いわゆる女言葉を用いるのも特徴的である。

- ・「いまハッパへ火をつけたんですの」(p.33)
- ・「毛虫がいますわ！」(p.36)

故郷の土地に強い思いを寄せる朽助は地域方言を用い、物理的にも心理的にも故郷と距離を置く「私」には共通語を、土地に対しても人種も性においてもソト／有標の人間であるタエトには共通語と女言葉を用いている。このように、役割語という概念を適用すると、井伏のキャラクター設定の巧みさが改めてわかる。

役割語を用いた作品には、共通語＝主人公、方言＝脇役という構図が見られるという（金水 2003）。田中（2011）によれば、このことは戦前の戯曲においてすでに成立しつつあったとされており、井伏作品にも同じ構図が発見できるだろう。とはいえ、この構図によって『朽助のいる谷間』における主人公は誰かなどということを議論したいわけではない。ここで重要なのは、その構図に従うことで読み手がスムーズに「私」の語りに視点を合わせ、物語世界を経験できるという点である。

さて、朽助が話しているのは一体どの地域方言なのだろうか。前述したように、井伏は個別の地域方言をベースにして、作品の物語世界に適した方言を創作している。野地（1956）は「井伏氏の作品にみられる中国弁の地域的焦点は、備後地方のうち、その東南部、とくに旧加茂村栗根を中心とする山間部奥地すじにおかれ、ついで尾道などを中心とする内海ぞいにおかれている」としており、同様の指摘は藤本（1972）でもされている。

ここでは、従来の研究以降に出版された資料（『日本方言大辞典』小学館、1989年）を用いて、『朽助のいる谷間』で使用された方言の地域を確認する。特徴的な文末詞「がな」「ぞな」「がす」が用いられている地域を以下に挙げた。注目すべきは、広島方言の有無である。

- ・「がな」＝栃木、三重、滋賀、兵庫、鳥取、愛媛、熊本
- ・「ぞな」＝愛知、滋賀、岡山、山口、香川、福岡、大分
- ・「がす」＝青森、宮城、秋田、山形、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、山梨、静岡、大阪、広島（比婆郡）、徳島、愛媛、長崎、熊本

広島方言として記載されていたのは「がす」のみであり、しかもそれは県北の旧比婆郡（現・庄原市）で報告されたものであった。もちろんこれだけで断言するのは性急であろうが、先行研究の指摘と重ね合わせれば、『朽助のいる谷間』での方言はやはり井伏の自方言を写し取ったものではないと考えてよいだろう。そして、このことは、井伏作品に用いられるすべての方言に適用可能である可能性が高い。

この井伏の方言使用は、方言コスプレとして捉え直すことができる。井伏はステレオタイプを巧みに利用することで物語世界を構築していると考えられる。田中（2011）も、小説での方言使用について、井伏の名も挙げながら「玄人による「方言コスプレ」といえるだろう」としている。では、この作品で井伏が利用したステレオタイプとは、どのようなものだろうか。田中（2011）

は、現実の土地と結びついた方言を「リアル方言」と呼び、「本物」(本方言／自方言)とは別の「らしさ」を頭の中で共有する方言のことを「ヴァーチャル方言」と呼んでいるが、このように方言コスプレという観点で登場人物たちを捉え直すと、興味深いことがわかる。

まず、井伏の方言使用がヴァーチャル方言の使用であると再定式できることである。もう一つは、井伏が描いた方言だけでなく、登場人物たちも土地(故郷)との結びつきを消されているという点だ。朽助はハワイ帰りの使用人であり、タエトはハワイ出身かつ使用人側の存在である。残る「私」は、かつてウチにいた存在だと考えられる。つまり、この作品はソトの人の物語／ウチなき物語なのである。どこのものでもない方言は、三人ともあの谷間に根ざしていない存在であることを描きだす。

方言の使用はどこか牧歌的で、故郷への回帰と結びつけたいくなる。それ自体「地域方言」のステレオタイプであり、受容はできる。しかし、この作品をヴァーチャル方言で描かれたものとして捉え直すとき、むしろ「郷土」あるいは「故郷」の不在性の強調、「郷土」概念への鋭い問い直し(新城2003)こそ、この作品の方言が描く物語世界にふさわしいまなざしだと言えよう。

4.2 『二つの話』と社会方言

小説に用いられる方言には、地域方言だけではなく社会方言も含まれる。ここでは、『二つの話』に用いられる社会方言に注目する。次の2例は、それぞれ【荒縄の帯に貧弱な着物をきた鬚面の男】【野郎あたまの若者】の発話である。

- ・【荒縄の帯に貧弱な着物をきた鬚面の男】

「へい、このお邸が、甲府様へ御祇候の新井様のお宅で御座ります」(p.263)

- ・【野郎あたまの若者】

「話は違うが、おいらは昨日、あのお邸出入りの筆屋から聞いたもんだ。あのお邸におる連歌師は、古今伝授つうのを心得ておるそうな。」(p.278)

このように、井伏は低い階層の人物を描くために「へい」「おいら」「つう」などの社会方言を用いていることがわかる。

社会言語学では、地域方言が社会方言として用いられることが知られている。すなわち、社会階層の高→低に伴って、共通語→地域方言のグラデーションが存在するのである。この作品においても、低い階層の人物が地域方言で描かれている。また、子どもが地域方言で描かれているのも興味深い。

- ・【(禪ひとつの) 胸毛の濃い大男】

「いや、西京からお輿入れの、お人形のようなお姫様だんべ。」(p.278)

・【東京から来た男子の疎開学童】

「おじさん、おじさん。いつかのプロペラの廻る話、あれどうなったずら。もう調べたずら」(p.257)

『日本方言大辞典』によると「だんべ」は岩手県、秋田県、栃木県、群馬県で用いられているという。ということは、井伏はこれらの地域出身の人間を描きたかったのだろうか。おそらく、そうではない。ここまで確認してきたように、社会方言においてもヴァーチャルな言語使用が認められるということだろう。地域方言をベースとして「低い階層の人間らしい」言葉を創出することで、井伏は人物描写を巧みに行っているのである。

同様のことは、疎開学童の「ずら」にも言える。「ずら」は神奈川、東京（島嶼部）、長野、岐阜、静岡、愛知で用いられているとされる（『日本方言大辞典』）。たしかに東京での使用は報告されているものの、島嶼部という限定つきだ。これをそのまま適用すれば、この子どもたちは東京の島嶼部からやってきたことになる。もちろんその設定を否定する材料はないが、この作品において、子どもたちを島の出身者として描く必要も見当たらない。この「ずら」は、どこかの土地と結びつけるためではなく、子どもという社会的属性あるいはそれに付随する子どもらしさ（≒素朴さ／純粋さ）とキャラクターを結びつけるためのものであったと考えるのが妥当であろう。

4.3 『さざなみ軍記』『ジョン万次郎漂流記』と共通語

井伏（を含めた作家）にとって、これらの表現選択は物語世界を構築するうえで非常に重要であることは間違いないだろう。方言を選択するかどうかという自問自答は、同時に共通語を選択するかどうかという問いでもある。『さざなみ軍記』と『ジョン万次郎漂流記』において、井伏は「方言を使用しない」という表現選択をしていることがわかる。

まず、『さざなみ軍記』から見てみよう。たとえば、逃避行中に会おう少女との会話場面である。

私は六波羅言葉で彼女に質問した。

—その梨の実は熟しているようだが、(略)今はすでに秋たけなわである。

少女は梨の木の幹にすっかり顔をかくして次のように答えた。私は彼女の田舎言葉を好ましく思った。

—よく走る馬に乗って坂路をかけのぼっても危険ではなかったか？(略) (p.29)

「私」の説明に従えば、「私」は六波羅言葉で話し、少女は「田舎言葉」で話しているはずである。しかし、京都方言も「田舎らしい」方言も用いられていない。このように『さざなみ軍記』の物

語世界は共通語で構成されている。このことは、実に頼もしいキャラクターとして描かれる宮地小太郎の初登場場面でも同様である。

彼の言葉や発音は、よほど辺鄙な土地でなければ通用しないものであった。(略) われわれの六波羅言葉に言いなおしてみればおおよそ次のようであった。

—ただいま招聘によって参上したわれわれ主従四名のものは、今日の合戦に際してこの高矢倉で、見張の任務に就くことを、一生の光栄と思うものである。 (p.41)

小太郎の話す「よほど辺鄙な土地でなければ通用しない」言葉は、結局最後まで聞くことができない。このほかにも漂泊先の人々が話す「よくわからない言葉」は出てくるが、すべて六波羅言葉に変換(翻訳)されており、共通語で書かれている。といっても、現代共通語にきれいに重なるわけではない。井伏が創出した「六波羅言葉」は、イメージとしての武家言葉であり「私」の「武士らしさ」を描く素材として使われている。「私」のキャラクター設定用に共通語をベースとした社会方言を用いているという言い方もできるだろう。

たしかに、共通語を選択することで「私」の「武士らしさ」は描きやすくなったのかもしれない。だが、地域方言との併用も可能であったはずだ。井伏はなぜ地域方言を使わないという選択をしたのだろうか。六波羅言葉だけが用いられることの効果とは、どのようなものだろうか。

一言でいえば、それは視点の一致だろう。『さざなみ軍記』は「私」(武蔵守平知章)の一人語りで構成されている。六波羅言葉とは「私」の言葉であり、両者は不可分の関係にある。こうすることで、読み手の視点は語り手である「私」へと自然に収斂していく。知章と読み手が一つの「私」へと重なるとき、一人語りという構造は強い共感を喚起させるだろう。また、こうした土地に根ざさない言葉の使用は『朽助のいる谷間』にも見られることであった。『朽助のいる谷間』と『さざなみ軍記』に土地の漂泊という共通項を見出すとき、視点の収斂を促す構造と相まって、井伏の作家としての高い力量を再認識させられる。

次に、『ジョン万次郎漂流記』を見てみよう。井伏はこの作品においても、地域方言を使わないという選択をしている。たとえば、下記の例は万次郎が仙台の船へ声をかける場面である。

「皆様方の船は土佐に帰らるる船か？」

屈強な若者は土佐訛りの言葉が通じなかったのか、合点が行かないような顔をして、

「知らぬ」

と答えた。 (p.192)

万次郎の発話だけを見れば、彼が非方言形で話しかけたかのように思える。しかし、実際は(少なくとも音声学的レベルにおいて)土佐方言で話していたことがわかる。にもかかわらず、井伏

は方言形を用いて描いていない。相手方も、「知らぬ」だけではあるが仙台方言を話しているようには思えない。

『さざなみ軍記』でも見られたこのような「翻訳」は、万次郎がアメリカに渡って以降、より顕在化してくる。

寅右衛門はジョン万の顔を見ると大いに驚いて、

「おお、万次郎ぬし！」

と云ったかと思うと次は^{アメリカ}亜米利加語で、

「なんという珍しいことか、これは珍しい再会である。お前はこの地にいつ来たか？」

と云った。 (p.194)

「ゴウエモン、ゴウエモン。其方は拙者を忘れたか？」

見ればホーランド号の船長ホイットフィールドであった。

にこにこと笑いながら、

「其方、拙者をまだ覚えているか？」 (p.197)

寅右衛門は万次郎と共に遭難した土佐の人間である。アメリカでの生活が長くなり、むしろ英語のほうが扱いやすくなっていることが描かれている。ここで重要なのは、寅右衛門の「亜米利加語」が共通語で表現されていることである。正確に英語で描写すれば、読み手の理解を妨げることもになるので避けたのであろう。ただ、こうした翻訳作業は字幕のような効果を生み出し、直後に続くホイットフィールドとの会話に読み手を違和感なく迎え入れる。

言うまでもなく、ホイットフィールドは英語母語話者であり、「其方」「拙者」などと発話しているとは考えられない。直前の寅右衛門との会話をコンテキストにすることで、読み手は「其方」「拙者」を字幕として、つまり実際には発話していない言葉として解釈可能になる。振り返れば、『さざなみ軍記』での六波羅言葉などもこうした字幕効果のもとで成立していた。このように読解の文法を説明なしに成立させる点においても、井伏の技量の高さが見てとれる。

4.4 方言×小説＝物語の力

井伏作品において、方言はキャラクター設定と字幕効果を支える重要な要素であることが確認できた。また、その方言使用は方言コスプレと重なるものであり、土地に根ざさない方言を創出することで物語世界を構築していると考えられる。方言を使うという選択は同時に、方言を使わない（共通語を使う）という選択の存在を前提とする。事実、井伏は方言 - 共通語という二項対立を巧みに利用しており、どちらともつかないような言葉を用いて作品の物語性を高めることに成功している。

つまり、井伏が描く物語世界／小説というナラティブの持つ力は、彼の表現選択への意識に裏打ちされたものだと考えられる。彼の表現選択への意識は、『朽助のいる谷間』の改稿状況からも見て取れる。なお、以下の初出原稿については前田(2003)からの引用である(下線は脇による)。

- ・**初出**「生まれたる雉子の雛は、うちへ持って来て飼うてみたれども、十日ばかりで死んでしもたです。」
⇒「死んでしもたでがす。」(p.41)
- ・**初出**「(略) 吾れ自身が子を嘔み殺すとは何ですか!」
⇒「嘔み殺すことは何たることでがすか!」(p.41)

すべての改稿箇所を挙げることはできないが、初出から改稿状況を追っていくと、上記のように方言への修正が各所でなされている。井伏が方言と共通語の二項対立を念頭に、意識的に方言を選択したことがわかる。

井伏作品のみならず、小説における様々な登場人物は、そのキャラクターをこうした表現選択によって構築されているのだろう。その選択基準には、読み手への配慮(たとえば読みやすさ)も含まれる。しかし、最も重要な基準は、思い描く物語世界をテキストとして構築すること、いわば「物語の力」を高めることにあると考えられる。

5. 井伏の言語観

作家の表現選択については、ほかにも考えるべき要素が存在する。それは、作家自身の言語観である。井伏が意識的に方言を用いたことには、彼自身の言語観も大きく関わっていると考えられる。井伏の作品や自伝などを読むと、彼がいかにか言葉と対峙していたのかがわかる。その対峙ぶりは、まさに「井伏は言葉に敏感な作家」(相原 1981)と評されるにふさわしいものである。この章では『槌ツア』と「九郎ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること』から、彼の言語観と、地方／方言⇔東京／標準語という構図へのまなざしを明らかにする。

この作品において、井伏は自身の家を「なにかにつけ時代おくれしてゐた」と振り返り、その証左として父母の呼称を挙げる。井伏自身は「トトサン」「カカサン」を用いていたのだが、「呼ぶのが恥かしくなつた」という。それに対比される言葉として「オトウサン」「オカアサン」を挙げ、これらは「文化的な言葉」「都会的な用語」であるとする。一方で、この言葉は「厳しい感じ」「品性あるものとは見なされなかつた」という。都会の言葉(≒標準語)を文化的としながら同時に品性がないとする矛盾に、言語やアイデンティティをめぐる井伏の複雑な感情が表れている。また井伏は、これらの言語使用は、「階級的区別」「自負するところがあるかないか」によるものだとしており、彼の言葉への、特に社会方言への鋭いまなざしを見て取れる。

その社会方言へのまなざしからも、東京と標準語への複雑な感情が見えてくる。父母の呼称を「オトツツアン」「オカカン」と改めた同級生（石神井小二郎）に対して、井伏は「進取の気象を羨んだ」「鮮やかな転向ぶりが羨ましかった」と吐露している。一方で、井伏自身は「転向」を羨みながらも「時流に即し『オツカサン』と呼ぶべきだと思ひながら、気恥ずかしくて」言えないでいる。このように大阪弁や東京弁を「都会的な言葉」「大都会の言葉」として憧れながら、「純粹な東京弁を覚えるには、われわれ田舎者はすくなくも二十年くらゐ東京に住む必要がある」（井伏の祖父の語り）とする認識は、井伏自身のみならず故郷の成員に共通する言語観であっただろう。

少なくとも井伏の中には、こうした「都会的な言葉」への憧れと、それに相対するように醸成された故郷への劣等感が同居していたと考えられる。その劣等感は同時に、強いアイデンティティの裏返しでもあろう。井伏にとって、ヴァーチャル方言の使用は単なる技法に留まるものではなく、地方／方言⇄東京／標準語と向き合う自分自身の投影でもあったと考えられる。そのアイデンティティは、「井伏満壽二」と「井伏鱒二」が複雑に絡み合うことで成立していたのかもしれない。

岩崎（1983）が指摘するように、こうした複雑さに井伏の作家としての特異性を見出しうる。

異質の言語、またはそれによって象徴される異質の文化に対する無意識の恐れ、あるいは防禦本能であろう。しかも、それは同時に文化の中心である都会・東京の言葉であるが故に「一もくも二もくも置」かざるを得ないものであったのも事実である。とりわけ、作家志望の井伏にとって、「東京言葉」がどのような意味を持っていたかは想像に難くない。

(p.18)

ただし、その深刻さは、いわゆる地方出身の作家が経験したであろうものとはまるで様相を異にしている。だいいち、井伏には、地方出身作家が持っているところの田舎と東京との相克がまるでない。ここに、地方出身の近代文学者における井伏の特異な個性があるといってよい。(p.18)

個人としての東京／標準語への憧れと「防禦本能」は、作家としての井伏に大きな影響を及ぼした。ただ、「相克」とは種を異にするものであったのだという。岩崎（1983）は、「東京言葉」を「潔くあきらめる」という図式に（略）井伏の抵抗の姿勢をみる」すなわち「同化の放棄」に注目している。これに従えば、井伏の言語観において、地方／方言⇄東京／標準語という二項対立は、乗り越えるべき対象ではなくなっていたということになるだろう。だが、それは諦念の類ではなく、まして憧れや密やかな同化志向でもない。おそらく、地方／方言と東京／標準語の在り様を正面から「潔く」引き受けるという姿勢であるだろう。

だが、地方／方言に根を下ろすことは、東京／標準語によって「いくらでも置き換え可能な“他者なるもの”」（宮崎 2002）へと回収されてしまう可能性を孕む。東京／標準語のための「輸血」に使われてしまうかもしれないのである。作品内の方言使用は、井伏にとって重要な演出技法であると同時に、その回収圧力への抵抗姿勢と批判的なまなざしの表明であったとも考えられる。

6. 方言コスプレと消費される「方言」

井伏は、東京／標準語への複雑な感情と向き合いながら、物語世界の構築のためにナラティブ（小説）においてヴァーチャル方言を使用していた。では、現代に生きる私たちは、自方言以外の方言をわざわざ用いて語ること（方言コスプレ）で何をしているのだろうか。本章では、むすびに代えて、現代社会における地域方言の社会的機能／価値について考察を加えたい。

方言の社会的機能として、まず挙げられるのは、社会（秩序）とアイデンティティの構築・維持であろう。野家（2005）の言葉を借りれば「経験の伝承と共同化による規範の生成」とも言える。相互行為秩序のレベルへと視線を移せば、対人関係の構築と維持という説明も可能である（Gumperz1982, Brown&levinson1987）。

ほかに、言葉遊びという可能性も考えられる。すなわち、発話すること／表現することそのものを目的とした自己充足的な行為である。たとえば、井上ひさしの『吉里吉里人』などを読んでいると、それを実感することができる。

吉里吉里語による『坊っちゃん』はこう書き出してあった。

親がらの無茶で小供の時がら損ばっかすてる。

（略）『雪国』の冒頭は以下のように翻訳されていた。

国境の長げえトンネルば抜けっと雪国だったっちゃ。（pp.88-89）

もちろん、ここには作家としての表現上の実験も含まれているだろうし、社会への何らかの意思表示やアイデンティティの表明も含まれているかもしれない。いずれにしても、「音」としてつい再現したくなる秀逸な表現選択である。

では、日常会話における方言コスプレという現象については、どう考えればよいのだろうか。田中（2011）は、方言コスプレが首都圏にも方言主流社会にも見られることから、その機能を「リアル方言の弱体化に伴う親密コードの一部肩代わり」だと結論づけている。たしかに、Goffmanの一連の研究を思い出すとき、この現象は（少なくとも若年層の人々にとって）相互行為秩序を保つための重要なフェイスワークを示しているのだろう。

方言コスプレが興味深く重要な現象であることは間違いない。しかし、その功罪について、特に罪の部分について、この概念の提唱者である田中氏は追究しきれていないと考える。田中（2011）は、方言コスプレに含まれるジェンダーや地域間格差に関する差別意識（「庇護意識」「支配意識」

「上から目線」など)を認める一方で、従来指摘されていなかった肯定的な側面を積極的に評価する。

しかし、一方、「方言萌え」という感性や、ヴァーチャル方言を用いた「方言コスプレ」といったキャラ着脱行動が、ポジティブな感覚で広く受け入れられているということも事実である。(略)

地域間・ジェンダー間における問題や不均衡さを内包する、少なくとも内包してきたという点を直視しなくてよい、ということではなく、そこに内包されてきた問題や不均衡さをあっけらかんと踏み越えていく新しい感覚が、従来の「方言」を「恥ずかしいもの」「カッコわるいもの」として見るような「方言コンプレックス」や、地域間・ジェンダー間の温度差などを解消していく原動力となってきたということも指摘しておきたいのである。(p.237)

たしかに、田中が実施した調査では、方言コスプレの動機として「うらやましい」「なんとなく可愛い」「なんとなくいい」などが挙げられており、使用者の意識としては自方言以外の方言に好意的であることがわかる。ただ、田中自身の「あっけらかんと」という言葉が表しているように、そこに積極的な評価と言えるほどの態度は見えず、むしろ受動的かつ無意識的で自己充足的な方言使用だと捉えたほうが正確だと考える。換言すれば、それは「ただ楽しいから何となく使う」ということでもある。

方言への好意的な態度の広がり、伝統方言(特に危機言語)の記述・継承に価値を見出す者にとって喜ばしいことだろう。そもそも方言をめぐる差別感情に正当性があるわけもなく、方言の撲滅など言語観としても言語政策としても愚かとしか言いようがない。一方で、井伏作品での方言使用と彼の複雑な感情を思い起こすとき、「うらやましい」「なんとなく可愛い」「なんとなくいい」という「あっけらかんと」した使用意識に対して、ジェンダーや地域間格差とは別の否定的な側面を見出すのである。

井伏はきわめて意識的に、選択的に、かつ自身の言語観やアイデンティティと対峙しながらヴァーチャル方言を用いていた。一方、現代の日常会話に見られるヴァーチャル方言には、そこまでの強い意識は見出せない。もちろん、だからこそ作家という存在の特殊性は担保されるのだろう。皆が井伏のように言葉を扱えない／扱わないからこそ、彼の作品は存在価値を持つのである。私たちの日常的な言語使用が無意識的であり、自己充足的な側面を含むものだというのは、わざわざ説明するまでもないことだろう。ただ、ここで指摘したいのは、コミュニケーションが持つ自己充足的な側面が、あるいは田中の言う「原動力」が、記号としての「方言」の偏った消費を引き起こしているのではないかという点である。

井伏作品も私たちの日常会話も、ヴァーチャル方言を使用し何らかのステレオタイプを利用し

ている点は共通している。しかし、土地との結びつきを意識的に失わせたのと、集合意識的に失ったのでは大きく異なる。会話の参加者が方言コスプレの楽しさのみ意識を向けるとき、すなわち、ヴァーチャル方言が自己充足的な目的によってのみ使用されるとき、「方言」は「アクセサリー」(小林2004)や「おもちゃ」(田中2011)でしかなくなる。

記号の消費が悪だと言いたいわけではない。そもそもそれは避けられないものだろう。ここで提示したいのは、「方言」のコンテキストとして／シニフィエとして付随している、土地に根ざすアイデンティティや生活世界が切り離され続けるとき、果たして方言の使用／存在に積極的な社会的機能を担わせることができるか、という問いである。自己充足的な、記号の消費としてのみ存在する「方言」は、きれいごととしての「伝統」「文化」「継承」「保存」に、いとも簡単に回収されてしまうだろう。そうすると、「方言の復権」というお題目をただ唱えて称揚するだけで終わってしまう。

つまり、方言コスプレの無批判的な受容／浸透は、方言をいよいよ「無くても困らないもの」にしてしまう恐れがあると考えられる。「アクセサリー」「おもちゃ」という表現には、親近感と同時に「存在の軽さ」も含意されうる。どちらも、いずれ捨てられる運命にあるのだ。他地域のものであっても「方言」という記号を無批判に消費し続ければ、その影響は自方言にも表れるだろう。地域方言が消失するとは思わないが、少なくとも、生活語としての方言は存在しなくなる恐れがある。言語への規範的な態度を喚起したいのではない。方言コスプレとそれが広がる現代社会を考察するうえで、こうした否定的な解釈も欠かせないと考えるのである。なぜ、方言はスタイルから(一部かもしれないが)「アクセサリー」「おもちゃ」へと変化しつつあるのか。現在の方言研究はそれに有効な回答を提出できていないのではないか。

危機言語の調査・研究が盛んな昨今、かつての方言学が想定していたような伝統方言は、今やわざわざ守らねばならない存在となった。そこに牧歌的な郷愁や自己充足的な「伝統」「文化」「継承」「保存」しか見出せないのだとすれば、言語の多様性の保持どころか学問領域の存立すら危くなる。たとえば「個性」と同じように、「方言」にも肯定的な価値が無批判に含まれてしまっているのなら、まずはそれを相対化することから始めなければならない。

付記

本稿は本学人間文化学部主催「文化フォーラム2015 井伏文学に描かれた備後弁」(2015年6月21日開催)にて報告した内容を、改題のうえ大幅に加筆・修正したものである。当日ご来場くださった皆様に改めて御礼申し上げます。

取り上げた作品一覧

井伏鱒二.1929[1996].「朽助のいる谷間」『山椒魚』新潮文庫

- 井伏鱒二.1930-1938[2012].「さざなみ軍記」『さざなみ軍記・ジョン万次郎漂流記』新潮文庫
- 井伏鱒二.1937[2012].「ジョン万次郎漂流記」『さざなみ軍記・ジョン万次郎漂流記』新潮文庫
- 井伏鱒二. 1938[1997].「槌ツア」と「九郎ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること『井伏鱒二全集』（第六巻）筑摩書房, pp.516-522. ※初出は1937年の『若草』13-11.
- 井伏鱒二.1946[2012].「二つの話」『さざなみ軍記・ジョン万次郎漂流記』新潮文庫
- 井上ひさし. 1985.『吉里吉里人』（上・中・下）新潮文庫

参考文献

- 相原和邦. 1981.「近代文学に現れた全国方言 中国」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会編『方言学論叢Ⅱ—方言研究の射程—』三省堂, pp.431-439.
- Brown, P. & Levinson, S. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤本千鶴子. 1972.「井伏鱒二の会話部方言表現技法—「朽助のゐる谷間」の場合—」『近代文学試論』10, pp.6-10.
- Gumperz, J.J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press. (=2004, 井上逸兵ほか訳『認知と相互行為の社会言語学 ディスクース・ストラテジー』松柏社)
- 灰谷謙二. 2012.「小津安二郎『東京物語』における尾道方言使用の意味」『尾道市立大学芸術文化学部紀要』12, pp.43-51.
- 磯貝英夫. 1981.「日本近代文学と方言」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会編『方言学論叢Ⅱ—方言研究の射程—』三省堂, pp.331-342.
- 岩淵悦太郎ほか. 1956.「文学と方言」『言語生活』61, pp.2-13.
- 岩崎文人. 1983.「井伏鱒二の随筆」『近代文学試論』20, pp.17-23.
- 金水敏. 2003.『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 小林隆. 2004.「アクセサリーとしての方言」『社会言語科学』7-1, pp.105-107.
- 前田貞昭. 2003.「井伏鱒二「朽助のゐる谷間」初期本文調査」『兵庫教育大学研究紀要』23, pp.1-17.
- 宮崎靖士. 2002.「井伏鱒二『言葉について』の「訳述」をめぐって—小説における方言《翻訳》—」『昭和文学研究』44, pp.137-149.
- 野家啓一. 2005.『物語の哲学』岩波現代文庫.
- 野地潤家. 1956.「井伏鱒二の作品の中国弁」『言語生活』61, pp.26-34.
- 大野茂男. 1954.「方言文学」『国文学解釈と鑑賞』19-6, pp.22-25.
- 新城郁夫. 2003.「郷土・翻訳・方言：井伏鱒二「朽助のゐる谷間」論」『日本東洋文化論集』9, pp.121-159.
- 田中ゆかり. 2011.『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店

title

Storytelling in Dialect: Ibuse from the Point of View of “Dialect Cosplay”

author

Tadayuki Waki

abstract

The aim of this article is to analyze the works of Masuji Ibuse from the point of view of “Dialect Cosplay” (A Cosplay Using Dialect). In addition, this study attempts to reconsider importance of dialect in the present day. The dialect in Ibuse’s works is deployed in the text as a resource for constructing narrative world. In comparison with him, we have an inclination to consummatory communication.

keywords

dialect, Dialect Cosplay, narrative, Masuji Ibuse